

漢詩紀行：安芸・宮島

藤野仁三*

今回紹介する五言律詩は、厳島神社に詣でたときの感慨を詠ったものである。時は2002年10月、広島で開催された「日本ライセンス協会30周年記念大会」の途中で足を延ばして参拝したときの作品。必ずしも新作ではないが、筆者にとっては初めて作った五言律詩であり思い出深い。

日本ライセンス協会の年次大会は、夏に開くのが恒例であるが、2002年には春に大阪でLESI国際大会が開かれたため、30周年の記念大会を兼ねて秋に開催した。広島から大会会場のホテルまでは海上バスでの移動であったが、途中、宮島に下りて厳島神社に参拝した。

今でも覚えているが、その日はまさに秋晴れ、汗ばむくらいの陽気であった。周囲を青い海と紅葉に囲まれ、丹塗りの柱、皮桧葺の屋根は、それはまさに絵に描いたようなコントラストであった。好天の下、多くのLESIメンバーが厳島神社参りを楽しんだのを記憶している。

厳島神社

山高灘瀬急	やまたか たんらいきゅう 山高く灘瀬急にして
社殿襟腰中	しゃでん きんよう うち 社殿 襟腰の中
潮満波頭宇	しおみ はとう いえ 潮満つれば波頭の宇
潮干浦上宮	しおひ ほじょう みや 潮干けば浦上の宮
丹塗映碧水	にぬへきすい は 丹塗りは碧水中に映え
檜葺和黄叢	かいしゅう こうそう なご 檜葺は黄叢に和む
鹿苑回廊下	ろくえん かいろう した 鹿苑 回廊の下
秋陽影無窮	しゅうよう かげむ なし 秋陽 影窮まりなし

(脚韻(中、宮、叢、窮))

宮島はいうまでもなく日本三景の一つ。神社を中心に前面の海と背後の弥山に囲まれた区域が96年に世界遺産に登録された。

周囲は瀬や灘が巡り、潮の流れは急である。また島のシンボルである弥山の標高は500メートル余であるが、小さな島ではそれはまさに天然の要害。その山懐に抱かれるように社殿がある。それを「襟腰(=襟帯)の中」と表現した。

五言律詩では偶数句の最終字(五字目)が韻を踏み、3-4句と5-6句が対になる決まりがある。

今回の詩では「潮満」と「潮干」、「波頭」と「浦上」の対語が潮位の上下を、「丹塗(朱)」と「檜葺(黒)」、「碧水(青)」と「黄叢(黄)」が色の対比を表している。檜葺は皮桧葺き、黄叢は黄葉した草むらのこと。

7-8句は回廊の下で遊ぶ鹿の影が長い秋の日差しを表現したもの。自分では気に入っている。

ただ、全体を読み直してみると、景の描写に終始し、情が描かれていない。まだまだ未熟である。

写真：友永秀輝

出典：

<http://menamomi.net/photo/miya/ituku.html>

(*東京理科大学専門職大学院 教授)